「自然を探る会」
1995年度活動報告

自然を探る会
代表　小泉　恵美子

例会について

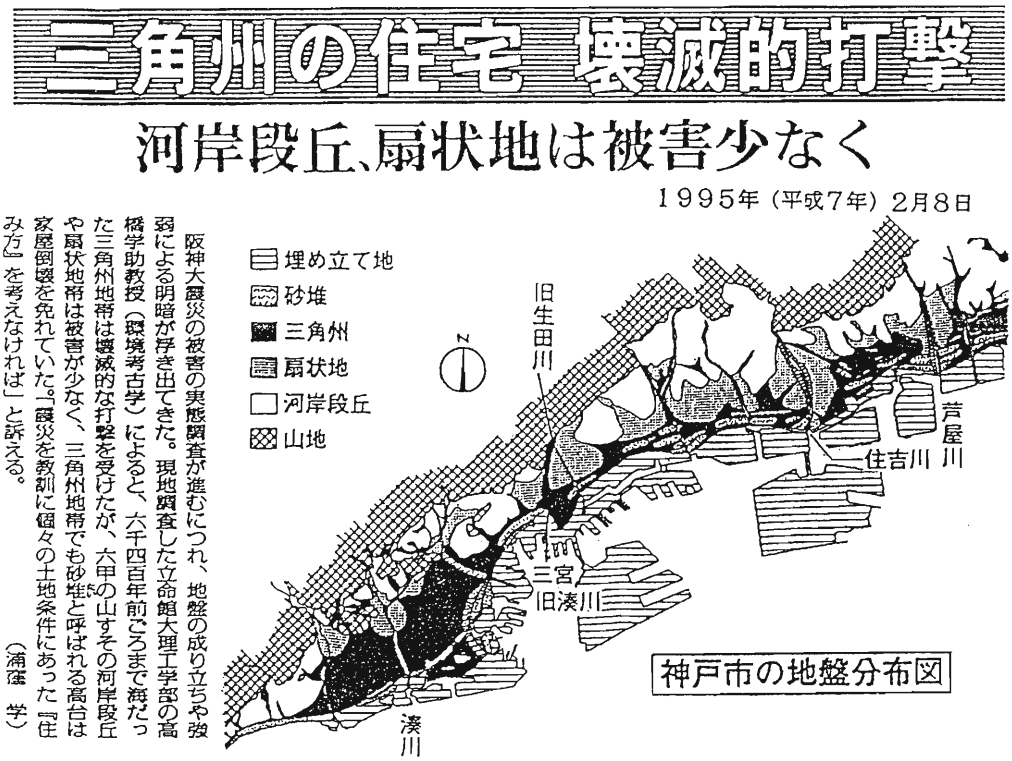
'95 3月例会（3月2日）

阪神大震災についての机上の学習、活断層の分布や避難の心構え、少しでも被害を少くする常日頃の工夫、近畿地方の地震の記録。

阪神・淡路大震災

阪神淡路大震災とはどんな地震か。

都市直下型地震、阪神・淡路地域　震度6－7、マグニチュード7.2



阪神大震災の被害の実態調査が進むにつれ、地盤の成り立ちや強弱による明暗が浮き出てきた。現地調査した立命館大理工学部の高橋学助教授（環境考古学）によると、六千四百年前ごろまで海だった三角州地帯は壊滅的な打撃を受けたが、六甲の山すその河岸段丘や扇状地帯は被害が少なく、三角州地帯でも砂堆と呼ばれる高台は家屋倒壊を免れていた。「震災を教訓に個々の土地条件にあった『住み方』を考えなければ」と訴える。（浦窪　学）

3月例会　今津座禅草観察について

実　施　　'95 3月2日　　13名
　　'96 3月17日　　15名

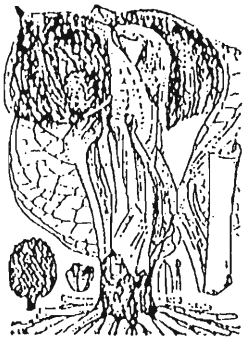
ＪＲ湖西線近江今津駅より自衛隊今津駐屯地の横を通り、高島バイパス下をくぐり座禅草群生地へ。昨年と大体同時期の観察会です。今年は比較的気温が低いせいか湖西の山々には雪が残り風も冷たい。座禅草の葉はまだ小さく大きいもので15cm程度、紫色の苞もやっと出て開いたところといった感じがする。苞の内側に肉穂果序のハンで押した様な型がはっきり見られる。竹薮のあちこちで、花はたくさん見られるが、雪がまだ残っており、竹薮も雪のせいで所々しなって曲ったままになっていたり、全体的に見て昨年より荒れた感じがする。今津川を隔ててすぐ住宅地が広がり住宅地に近い竹薮の切り倒しと開墾が行われて群生地に日光がさし込んできている。座禅草の育成に影響があることが心配である。竹薮の水面も油が浮いていたり、地表もなんとなく汚れている。同じサトイモ科のミズバショウやヒメザゼン草は見られない。４年前に尾瀬で観察した座禅草は臭気が感じられたが、今津の座禅草は全くといっていいほど感じられない。今津町の管理の方のお話を開くことができた。20年程前にこの地に群生が発見されてから、大学生や植物学者の間で維持する努力や研究が続けられてきたとのこと。私たち一般市民も自覚をして群生を残す努力を惜しんではいけないと思った。昨年は気温が平年並みで今年より少し高かったせいか、30cmから50cmもの大きな葉が見られたが、今年は葉が小さい。紫色やローズピンク、オレンヂがかった紫色など光沢のある苞の横に、あざやかな黄緑色の葉が寄り添っているコントラストがなんと美しい。

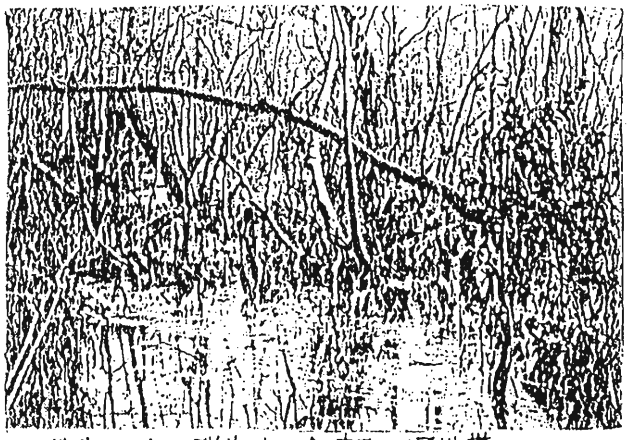
その後、今津川に沿って、せりやよもぎ、ふきのとうなどを採集しながら湖岸に向う。後ろの湖西の山々の雪が陽に輝いて谷筋がはっきり立体的に見え、一種幻想的な感じがする。湖面は波もなく、ユリカモメが浮かんだり休んでいたりする。旧街道を南へ昔の鯖街道の面影をしのびながら住吉神社、湖魚のつくだ煮屋さんをのぞきながら駅に向う。竹生島行きの観光船乗り場付近で岸辺の岩石の観察も行った。湖岸に分布する花こう岩の岩石はいろいろなタイプがあった。水晶花こう岩や花こうはん岩、石英や雪母の結晶の大きいもの、その中に水晶の結晶が見られるなど、花こう岩の誕生について、特にマグマから冷却団結する状況を勉強することができた。

〔今後の課題〕

竹生島の植物と地質を調べる。引き続いて毎年座禅草群生地の観察、湖北の仏像や寺の建物、歴史を調べる。

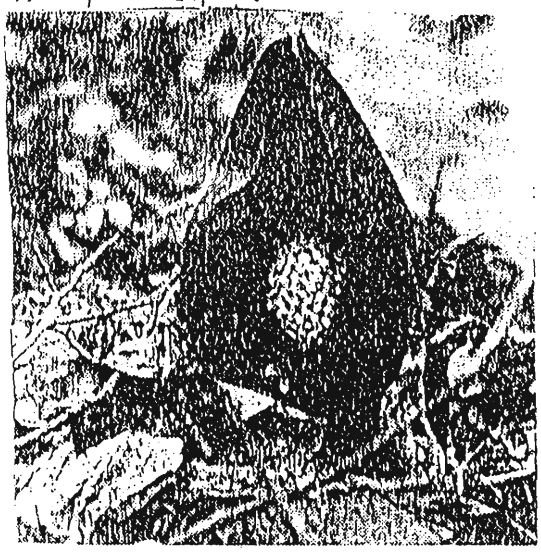
ザゼンソウ
（サトイモ科）





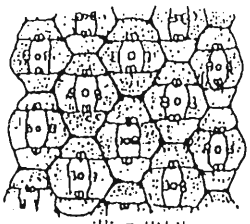
ザゼンソウの群生する今津町の湿地帯

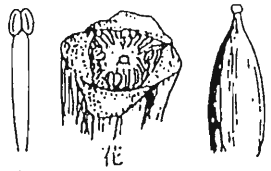
ザゼンソウは、山の湿原、谷川のほとりや林下に生える多年草で、滋賀県では4か所ぐらいに群落があるぐらいで、比較的珍しい植物である。今津町の群生地は、モウソウチク、ハンノキ、コブシ、タブノキ、ミヤマウメモドキ、ヤブツバキ、シロダモ、カマズミ、エゴノキ、ヒサカキなどの茂る林の中の湿地帯である。



ザゼンソウ（平成3年2月9日撮影）

ザゼンソウは、早春、葉がのびるよりも先に花を開く。花柄の大部分は地下にあって長さ10～20cm、先端に卵球形多肉の仏炎包をつける。仏炎包（仏像の後ろに立てる光背を「仏炎」という。）は、先がかたくなってとがり、長さ8～20cm、褐紫色で一方が開いている。仏炎包の中央に下からつき出した花軸が立ち、その上部のふくれた所の周りに小さな花が亀





甲模様にぎっしりと並ぶ。花は、花被片4、おしべ4、めしべ1からなり、花被片は肉が厚く、小さなおしべがその内側につき、間から小さな柱頭がのぞいている。おしべからは黄色い花粉を吐く。

果実（液果）は、その年の夏に熟してくずれてしまう。地下には、直立する太くて短い根茎と、太いひも状の根がたくさんあって、悪臭がある。

仏炎包を含めた花全体の形を、僧が堂の中で坐禅をしている姿になぞらえて、「坐禅草」という和名がつけられた。

ザゼンソウの四季

2~3月	花を開く。花期の葉はまだ伸びずに縦に巻いているものが多い。
4月上旬	この頃は伸びた葉柄のねもとにまだ花を見ることができる。
5月上旬	葉はいきいきと成長を続ける。この頃、葉のねもとのところどころに花を見ることができるが、花は枯れてきたといった感じがする。
6月上旬	葉は大きく成長する。葉面はまるい心臓形で、長さ、幅ともに40cmぐらい。葉肌はくぼみ、裏面に隆起する。
8月中旬	夏の暑さにも負けずに葉は茂る。葉柄は葉面より長い。
9月中旬	葉のおとろえが感じられる。
10月中旬	長い葉柄は曲がり、葉面が地面につく。この頃、来年の葉になる大きな芽（葉の巻いたもの）が地下から顔を出している。

平成2年4月1日撮影

平成2年10月6日撮影

※ 今津町のザゼンソウ群生地は、まとまった面積に高密度に生育しており、良好な自然環境を形成しているとして、滋賀県自然環境保全条例第19条第1項第1号により、緑地環境保全地域として指定された。

4月例会

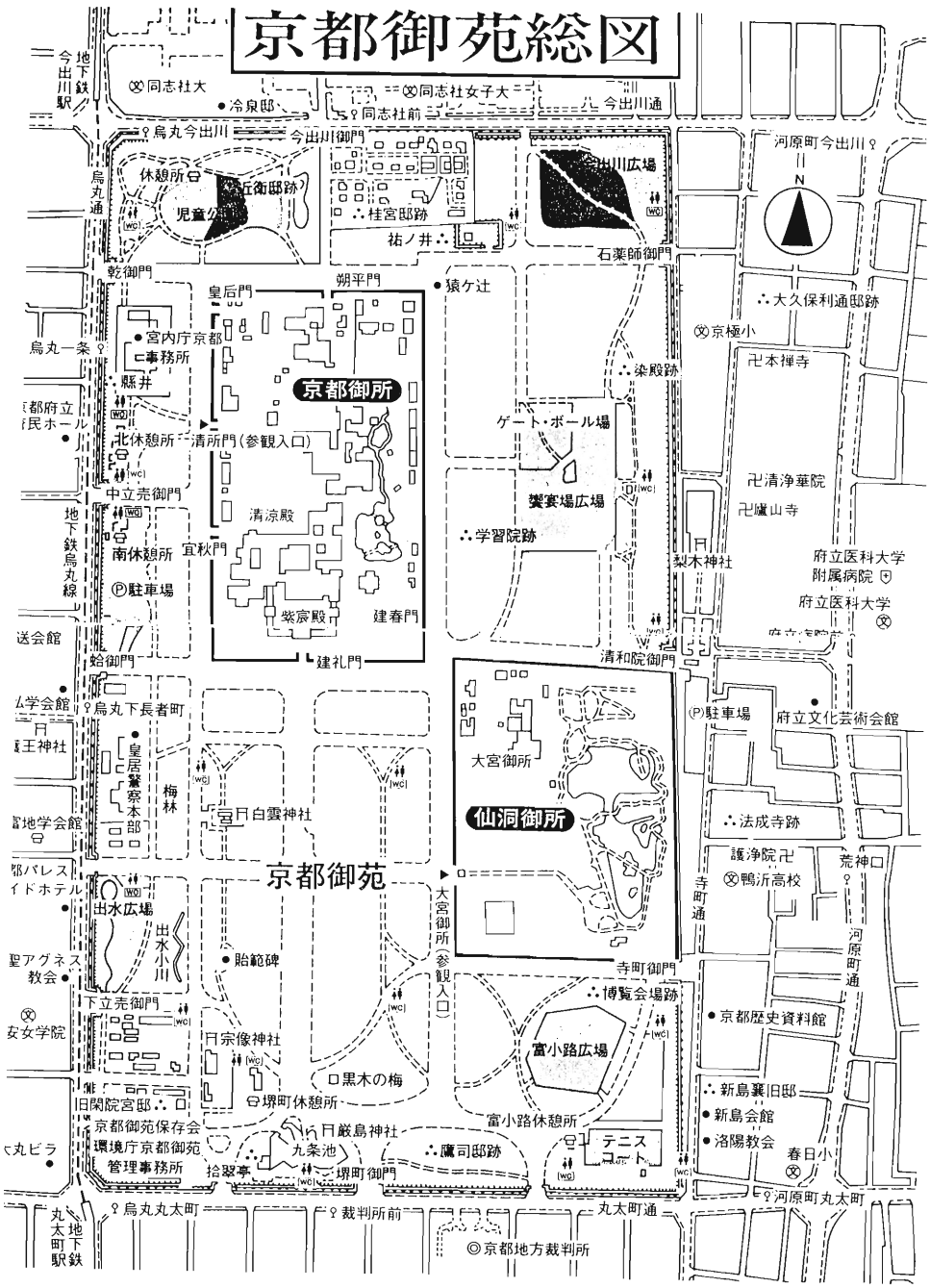
京都北山静原からオショロ谷、岩倉長谷へ、春の山菜の採集と地形の観察、そして実際に採集したものを天ぷらにして、食べてみる。

実施日　　'96 4月21日　35人

このコースは毎年のローテーションに入っているコースの一つです。歩くのも楽で、しかも距離が短い、ということで毎年参加者が多くなります。京都バス出町柳駅より乗車、静原小学校前で下車、地元の人たちが田植えの準備をしてられるのを横目で見ながら、静原川の川原へ降りて採集を始めます。水速は割い速いが、浅い川で川底はごろごろ石が見える。今年は気温が低かったので、昨年に比べてクレソンは小さい。大きいもので20cm程で、川の縁で小さな単位のかたまりとなって生育している。水から引き上げると白い根もいっしょに上がってきます。カンゾウやコーンフリー、よもぎも同じ河原で採れた。昨年沢山採れたつくしやふきのとうは数えるほどしか採れない。ひとしきり採集を行い、各自ビニール袋を手に持ってオショロ谷に入ります。杉の木立の中は、ショウジョウバカマが可憐なピンクの花をつけて、あちこちに見られます。足元には都アオイが、その根元に同じようにうす紫色の地味な花をつけています。昨年のこの時期は、コシアブラやたらの芽が見られたのに、今年は全く見られない。オショロ谷の谷筋の倒木の下で、まだそう時のたっていないコロコロした鹿の糞らしきものを見つけた。倒木が道をふさいだり、大きな梅の木が倒れて年月がたち、表皮の部分だけか筒のようになって残っていたりする。山の湧き水が斜面の間をぬうように流れている。20分程斜面を登ると長谷林道に出る。川幅1.5mぐらいの川に沿って二輪草やみつば、きらん草が見られる。その一角で、めいめいが採集してきたものを広げて観察を行う。食べられるものを順序よく天ぷらに揚げていく。うばゆりの葉はおひたしにしたり、味噌汁の浮かしにするよりは、こうして天ぷらにした方が、苦味も少くておいしい。好評だったのがコーンフリーとあざみの葉で、たんぽぽは意外に苦くて人気がない。このように河原で自分の採ってきたものを食するのは、例会が始まって以来、初めてのことで、皆がワイワイ批評しながら、にぎやかに楽しい時を過ごすことができた。その後先生の方から毒性のある植物（とりかぶとや毒ぜりなど）の説明があり、目で見て、さわって、舌で味うという体験学習を今後も機会をつくって行ってほしいという意見が、参加された方々から出されました。その後、岩倉村松へ出て、途中、長谷林道の出口あたりで、家具らしきものやゴミが不法投棄されているのを見て、非常に残念に思いました。今回採集して食べてみた植物はコーンフリー、たんぽぽ、あざみ、よもぎ、よめな、かんぞう、うばゆり、みつ葉、つばきの花、つくし、ふきのとう、クレソン、せり、みつば、あけび、おおばこ、たねつけ花、きらん草、十文字しだの18種を数えました。

〔今後の課題〕

静原川改修工事が行われるというのを聞き、来年、このあたりの植物群落はどの様な変化が起こるか、追跡調査を行う。同時に川の汚染度や水生昆虫の種類を調べる。一方、地元の人たちから昔の静原付近の様子や、山の木々の変化なども聞かせてもらう。



▲毒花の説明を聞く

▲途中のゴミの不法投棄現場

5月例会（5月21日）

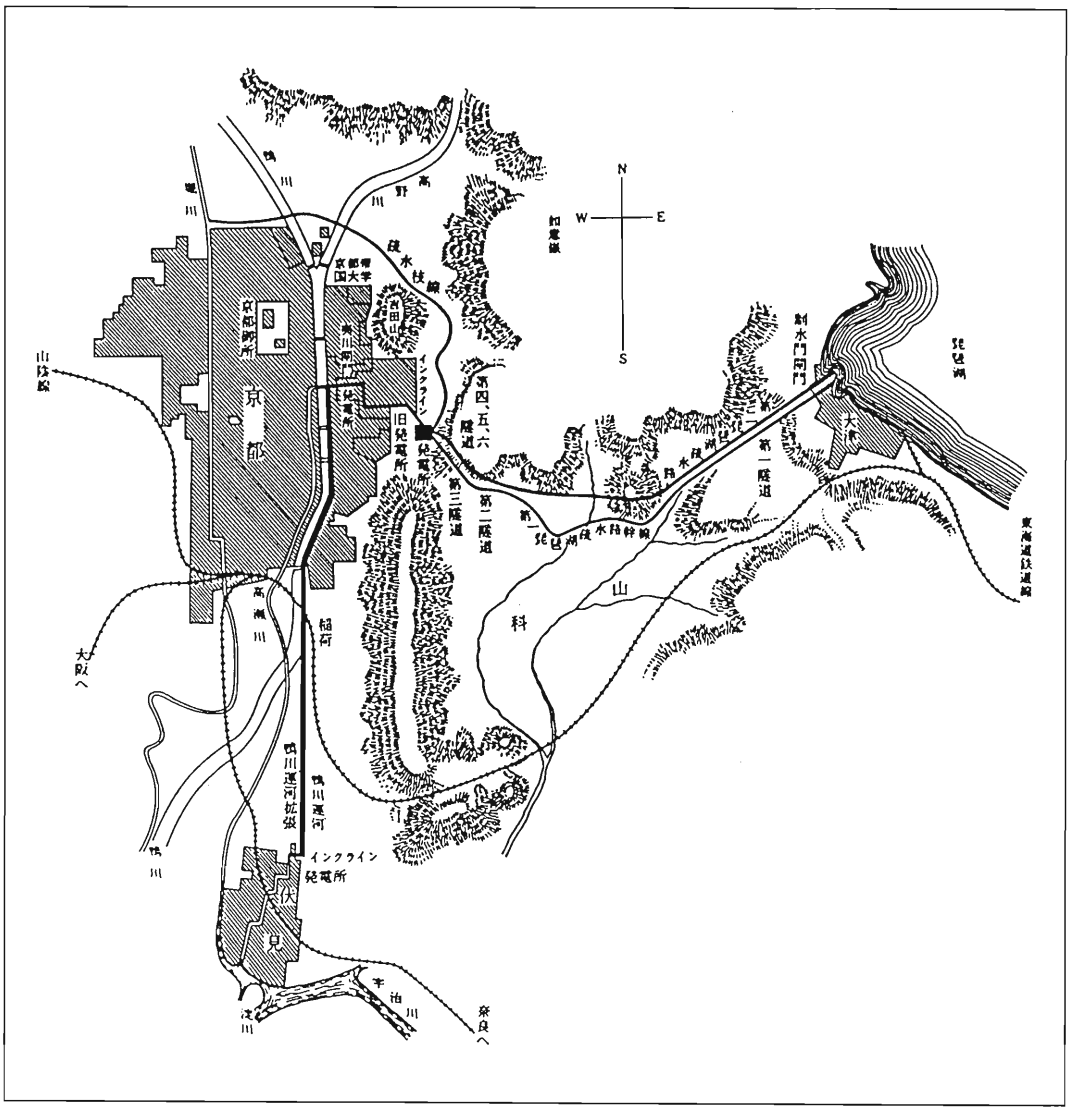
花背スキー場跡で、わらび、ぜんまい、たらの芽、よもぎなど地質の観察山菜の採集。

6月例会（6月18日）

阪神大震災の爪跡をみる。住吉川に沿って断層のずれた部分や六甲アイランドでの液状化現象、家屋の倒壊現場を見て地形の動きを観察する。

7月例会（7月2日）

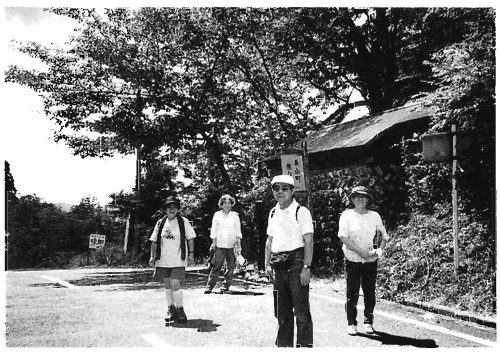
比叡平から山科へ、東山の地形や植物、疏水の歴史、御陵の植物観察。

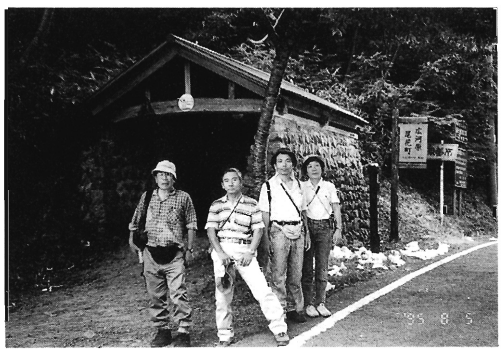


8月例会　広河原から佐々里峠へ

実施　'95 8月5日　　20名

出町柳から京都バスで2時間半、鞍馬、花背を過ぎ終点広河原に着きます。名の示す通り山あいの谷筋に明るい畑や田がつくられ、茅葺民家が点在しています。バスの終点から歩いて少し、地元の農家の奥さんが経営されている小さな喫茶店に入って一服、一休み。ドライフラワーやほおづき、またその上狸の剥製まで置いてある楽しい喫茶店です。裏の小川のせせらぎで水生昆虫を採集してみると桂川の最上流だけのことに、カゲロウやカワゲラが生息し、注意してみるとアマゴが泳いでいます。お弁当を食べて、面前に見える峠へ向って出発です。舗装された車の通るくねくね道を行かずに、一気に谷筋から背丈程もある熊笹をかき分けて登ることにしました。カエデやブナ、ナラ、竹、杉、松など240種の樹木、草花640種が見られるそうです。草いきれと土から上がってくる熱気、自分の吐く息とでハアハア言いながら急斜面を登ります。途中、テレビの部品が捨ててあるのを見て「こんな美しい山の中なのに」と驚き、腹立たしい気持ちでいっぱいになりました。両足ももつれかけた頃、やっと峠の氷室のある場所に着きました。八畳程の空間を石で四角く囲い、奥には仏像が祭ってあります。峠を渡ってくる涼風にしばらく身を置いて、セミの鳴声に耳を傾け都会の騒音も忘れて静かに木々や空気と対話を楽しみます。山肌には、2、3年もののカエデやクロモジ、山アジサイなどの幼木が育っているのが見られます。ここは京都を代表する大きな川の分流嶺地点だそうです。さっきバスで登ってきた方向は桂川の源流、峠の向うは日本海にそそぐ由良川の源流。今、私たちはまさに日本の背骨のまん中にいることになります。由良川の方は灰屋から芦生へ、桂川の方は、加茂川から桂川を経て、淀川そして大阪湾へ。一滴の雨水から、日本海へ、太平洋へ。そのちょうど分かれ道です。ここまで来れば車は少なく、本当に静かです。海抜872m、温帯落葉広葉樹林と暖帯性の広葉樹林が混じり合った、日本でも数少ない両方の植物群が数多く見られる貴重な地域です。佐々里峠近くでは、ブナの原生林が多く見られ、大木になって見事に成長していました。





ブナ

春、林床のあちこちで芽生えますが、ササ原の中など、暗い所で顔を出すものも多く、ほとんどが、1年目に消えてゆきます。

<1年目>

運よく生き残ったものも、薄暗い森の中では、5〜6年で、枯れてしまいます。生き残る唯一のチャンスは、上層の木が、折れたり、倒れたりして、光がふりそそぐようになったときだけ。

<5〜6年>

こんなところでは、他の種類の木に比べて生長の遅いブナも、後半からグイグイ追いあげ、他を圧倒します。

<20年くらい>

<100年〜>

こうして、数十〜数百年に一度のチャンスを得たブナだけが、今ここに大木として、生きているのです。

キンキマメザクラ

キンキマメザクラは近畿地方の山地にのみ見られる野生のサクラです。

一般にサクラの特徴は、葉のつけ根またはその近くに、「蜜腺」と呼ばれるホクロがついていることです。サクラは、ここから蜜を分泌して、アリを呼び、サクラにつく害虫を駆除してもらっているのです。

クロモジ

花は下向きにつきます。

春早くから咲くクロモジの花は、浅いところで蜜を出します。そのため、ハエなどの、口の短い、ナメるタイプの昆虫たちにとっては、この時期、かけがえのないエサ場になっています。

イワウチワとイワカガミ

淡い紅色の花、そしてつやのある鏡のような葉で、こけむした岩など、やや日かげの斜面を飾るのが、このイワウチワです

イワカガミは、1本の茎に2〜6個の花をまばらにつけますが、イワウチワは1本の茎に1個の花をつけます。

イワウチワとは、円形の葉をウチワにみたてて、つけられた名です。

イワウチワ

イワカガミ

ミズナラ

ミズナラの雌花と雄花は同じ株につき、花粉は、風に乗って雌花のところへ飛んでいきます。しかし、雌花と雄花の間は、若葉がカーテンのように、さえぎっています。これは、同じ枝に咲く雄花の花粉を受粉することを避け、違う株の花粉がつくチャンスを少しでも、増やすためなのです。

<雌花>

<雄花>

タムシバ

大きな、白い花が木に咲いていたら、近くへいって、においをかいでみましょう。

強い香りがしたらそれは多分、タムシバです。一見コブシのようですが、コブシのように、花の下に小さな一枚の葉がありません。冬眠からさめたクマが、この花をムシャムシャと食べます。

<タムシバ>
葉がない

<コブシ>
葉がある

オオカメノキ(ムシカリ)

丸くてほりの深い葉。カメの甲羅みたい?

白い大きな花は、かざり

こちらが本当の花。小さな花がたくさん集まっている。

虫喰い ムシカリの語源

オオカメノキは、ブナの林によく見られる低木です。少ない光をうまく受けるために、葉が重ならないような生長のしかたをします。

新しい枝は、前の年の葉のつけ根下から葉一枚の長さ生長する。

ショウジョウバカマ

ショウジョウバカマの花は、集まって咲き、ハナバチ、ツリアブ、ハナアブなど、多くの昆虫が、ひきよせられてきます。花は、10日ほどたっと緑色に変わり、光合成をして、葉とともに栄養をつくります。種で増えることは、あまりなく、葉の先に分身をつくって増えます。

ニリンソウ

1本の茎に2個の白い花をつけるので、この名があります。雪どけから木の葉が開くまでの林床の明るいわずかな期間に葉を広げ、花をつけます。木々の葉が繁り、林内が暗くなると地上部は枯れてしまいます。そして、地下に養分をためこんで、次の春をじっと待って暮らしているのです。

トチ

トチの花粉はマルハナバチに運ばれますが、このハチの体は、ちょうど、蜜を吸うときに、花粉がつくように、できています。

トチのほうは、マルハナバチにだけわかるように、蜜標を黄色くして、蜜のあることを知らせます。

コマルハナバチ　蜜標　花びら　トチの花　雄しべ

<4月中><4月末>

<5月末>

カエデ類

カエデの花のつぼみは、葉と一緒に冬芽の中に入っていて、葉が開くのとほぼ同時に、紅色の小さな花を咲かせます。秋には、プロペラ型の実をつけますが、花の頃にはすでに、雄しべの根元にプロペラのもとができているのです。

プロペラのもと　雄しべ　雌しべ

カエデの実

ヤマアジサイ

花の一番外側りにある飾り花には、雄しべや雌しべを持たず、虫を呼ぶ働きだけをしています。

この飾り花は、はじめ、青色か白色をしていますが、虫によって内側りの本当の花が受粉すると、下を向き、次第に紅色に変わっていきます。

枝の花

飾り花

マムシグサ類

においを出して、包みの中にキノコバエを捕まえます。

雄株の方には、捕まっても、脱出口があるので、キノコバエは、花粉にまみれながらも、ほい出することができますが、雌株に捕まってしまうと逃げることができません。

トチとは違って、受粉させてくれる虫には、何もあげない……ズルイッ!

<雌株>

<雄株>

クサソテツ(ココミ)

人がかがみこんでいるように見えることからココミ。

ココミは、シダの仲間です。シダは、今までに挙げた、種子植物と違い、胞子で増える植物です。そして、湿り気を必要とするので、シダのある所は、湿り気のある所と言えます。花をつけて、人目を引くということは、ありませんが、森の下には必ず生えています。

全体に、緑色でもがありません。

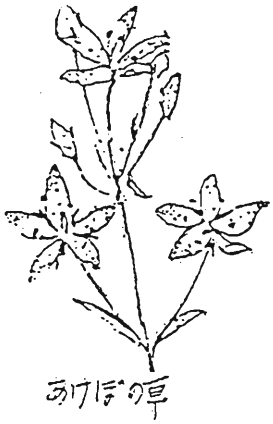
白いスジが2本。

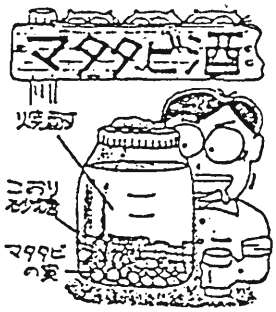
9月例会　9月17日

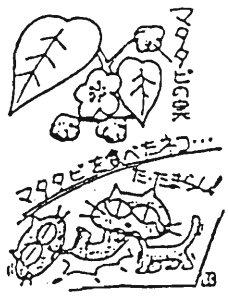
花背芹生貴船へ、観察記録

京都の北山、花背峠から芹生を回り貴船へ下りてくるこのコースは、「自然を探る会」の毎年のローテーションの中に入っているコースの一つです。北山杉の息吹きや小鳥のさえずりを聞き、小さな草花と語り合ったりしながら、それにも増して初秋の山の幸をふんだんにおみやげに持って帰れるのも楽しみです。

さて、京都バスで花背峠を越え旧道別れで下車していよいよ山道に入っていきます。ちよっと急な山道が前夜の雨であちこちから水が小川のように流れて、これを避けての歩行です。あざやかなピンク色のつりふね草や赤や白の水引き草が歓迎してくれます。その根に狂毒がある青紫のとりかぶとの花も見られます。途中からじゃり道となり、小さく欠けたくらま石がころがっています。この石は、みかげ石に似ていて、大文字山に見られる花こう岩と同じ持期、今から七千万年前位にできたものです。約500mぐらい登ると大きな杉の根元に大日如来をおまつりしたほこらがあります。私たちがこれから行く芹生の里と、今登ってきた花背、そして奥貴船に出る近道と、三つの道の出会いにあるこのほこらを、人々はそれぞれの村に行く時の目印にしたり、そっと手を合わせて山道の安全を祈ったりしたのでしょう。私たちは、そのほこらを右へ折れて林道を歩きます。毎年、そこには、黒花ひきおこし草が咲いているのです。今年もやはり少いけれど咲いていました。腰くらいの丈で、米粒くらいの紫色の花があちこちに微笑んでくれます。この道は新しく作られた道でところどころに地層が見られます。その地層は、２億5000万年以上も前に海底にたまった砂や泥、プランクトンの遺骸がホルンフェルスという岩石に変化をしたものです。小さな栗や、ひすい色をしたどんぐりも拾いました。まだグリーン色した山ぼくちや可憐なあけぼの草も見られます。８mmぐらいの深く切り込んだ五弁の白い花びらの内側に紫色の小さな斑点

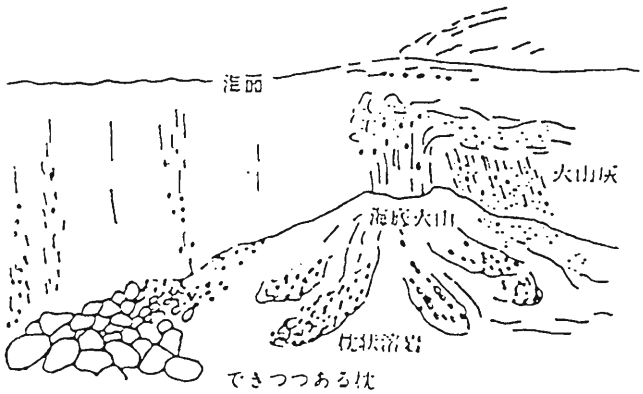






があって、おしべ、めしべが梅花のように立っていて小花ながら凛とした高貴さを感じさせてくれる花です。狭い山道を通り辺ぎ、車の通れるじゃり道に出ると右側にチャートの崖が見られます。プランクトンの遺骸でできたこのチヤートは１cmほどの厚さの板のような地層が何枚も重なっています。特にここのチャートは２億数千万年前海底火山が吹き出た時に、溶岩や火山灰が上から降りつもり大きくゆり動かされたので、白い筋が入ったりくしゃくしゃによったりしています。ボロボロにくずれたかけらが、足元にもころがっています。さらに、同じように海底火山から吹き出した溶岩で黒くて長方形をした輝石と呼ばれる鉱物も見られます。今、歩いているところの岩石や地層はほとんど溶岩や碇灰岩で２億数千万年前は、深い深い海の底だったのです。さて、そろそろ芹生の里につきました。時間もお昼を少し過ぎました。おナカもペコペコです。いつもの少し広くなった草原でお弁当を広げます。この場所の近くに、またたびの木があるのです。「猫にまたたび」といわれるように猫の大好きな木です。今年も小指くらいの細長い実がついています。また、旅ができるように、そして元気が出るように少し実をかじります。口全体にしびれるようなからさがひろがります。舌をしごいてもなかなかこのからさはとれません。実を焼酎やブランデーに漬けると甘くておいしいまたたび酒ができます。さて、おナカもふくれて、元気が出ました。芹生の小さな橋を渡って左側の崖には、みょうががいっぱい。思わずリュックを道に放り出して崖をよじ登って、しめった落ち葉の中のみょうがを採ります。よく太って大きなみょうががビニール袋いっぱい採れました。芹生の民家を過ぎると、これこそこのあたり一帯が海底火山であったという証拠にもなる枕状溶岩が見られます。この枕をいくつも重ねたような地層は、どのようにしてできたのでしょう。

２億数千万年前、海底火山の爆発で流れ出た1000度以上のマグマが海水に接して急冷し、外側は外皮ができますが中心部はすぐには冷えずドロドロしたマグマのままで袋の中に水を入れたような状態になります。つづいて噴火したマグマがその袋を破り海水中に流れ出してまた新しい袋ができます。こうして次々に枕

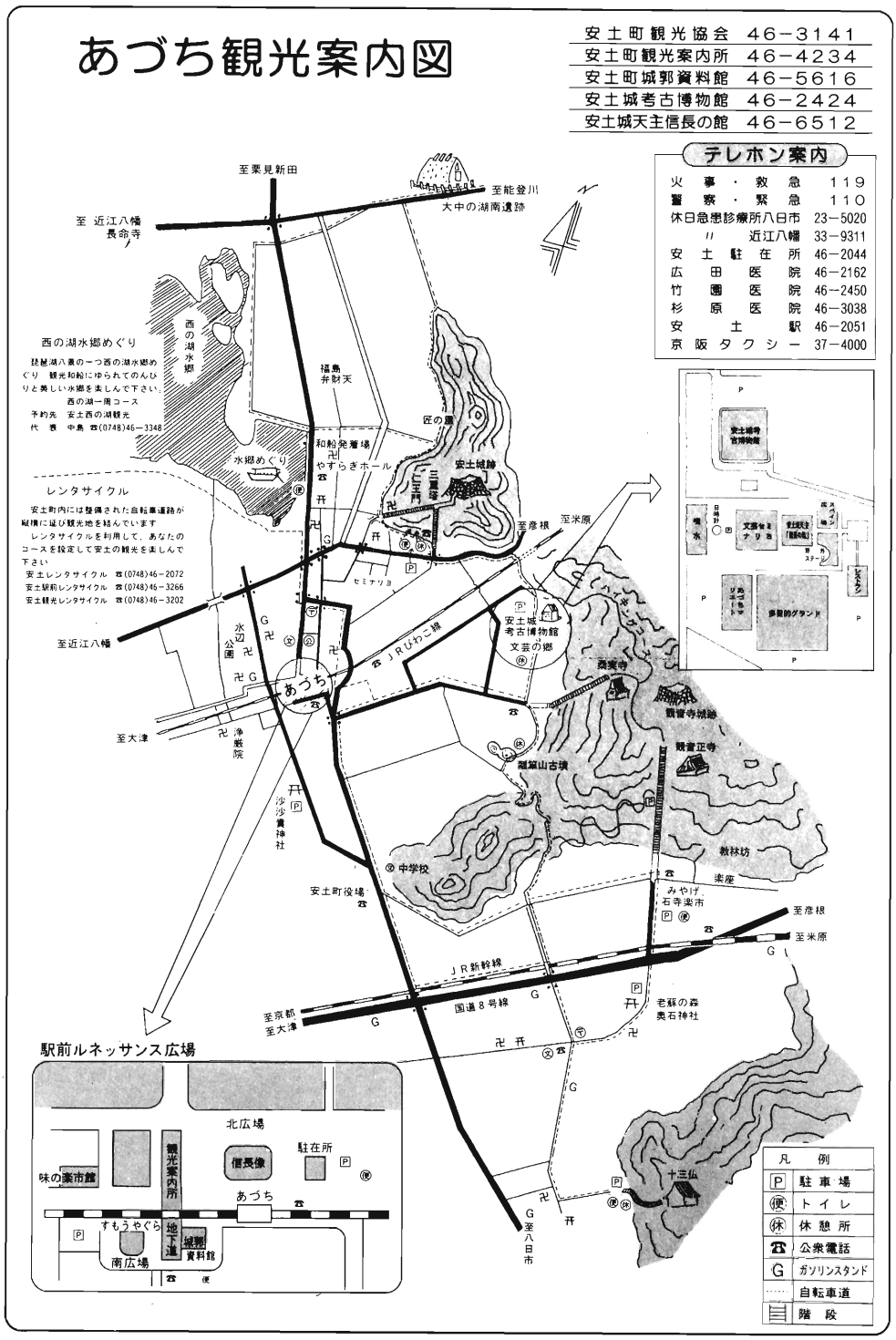


ができ積み重なっていきますが、新しい枕はまだ柔らかく、へこみがあったり下がったりします。その熱い枕の中は火山ガスが発生し、上の方に上がって気泡をつくります。このようにして固まってできたのが、目の前にしている枕状溶岩です。今海底火山が噴火しているハワイやアイスランドでは、この枕状溶岩ができる過程の観察ができるそうです。2億数千万年というとてつもなく長い時を経た自然のなかに立っている小さな私たち、つっかかっていけばパチンとはじき飛ばされそうです。そんなことを考えながら歩いている間に芹生峠につきました。海抜766m。銀色のすすきの穂が風になびいて、その向こうに京都の町が見えます。ここから先は下りです。舗装された道の両側はまっすぐにのびた大きな北山杉の林がつづきます。湿度が高くて霞がかかったような幻想的な中を進んでいきます。右側には小川が流れ黒い小さなさんしょう魚がいます。さあ、杉林の中に入ってうわばみ草の採集が始まりました。青いゴミ袋に持ちきれないほど採って、これもさっとゆがいて煮ものにしたりいためたりします。しゃりしゃりして、山ぶきの佃煮のようです。おみやげをいっぱい持って三々五々、楽しく語りながら、それでも一生懸命貴船を目指して歩きます。

やっと、貴船神社に着きました。ちょっと休憩してコーヒーを飲んで、京福電鉄貴船口までもう少し、最後の頑張りです。大きな自然の中につつまれた安らぎと、快い疲れを持って帰路につきました。

10月例会　10月29日

近江八幡、安土、湖東方面と大中の湖の干拓地で大規模農業の学習。



11月例会

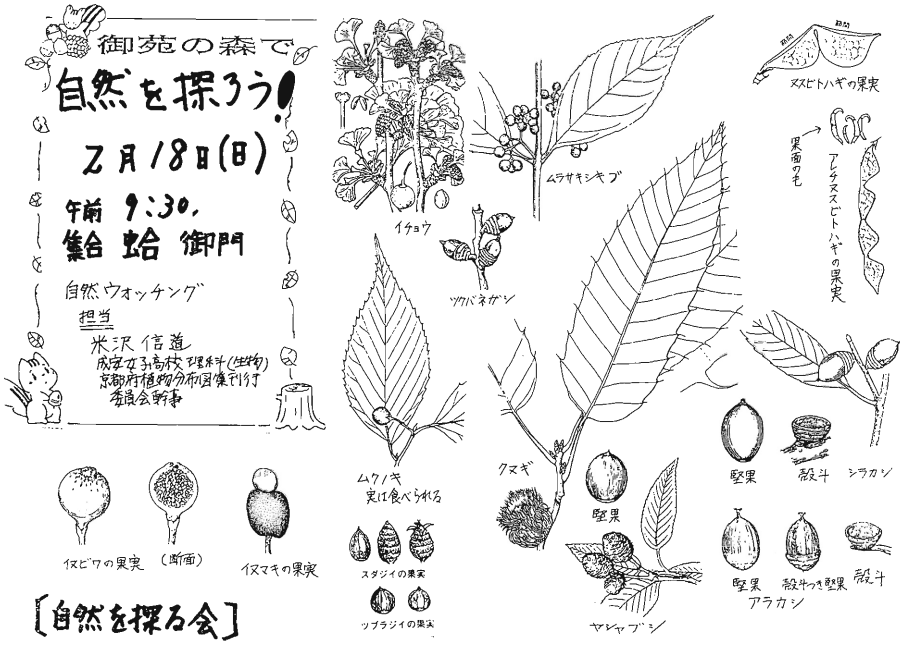
京都御苑の自然観察

実施　'95 11月23日　13人

　　'96 2月18日　24人

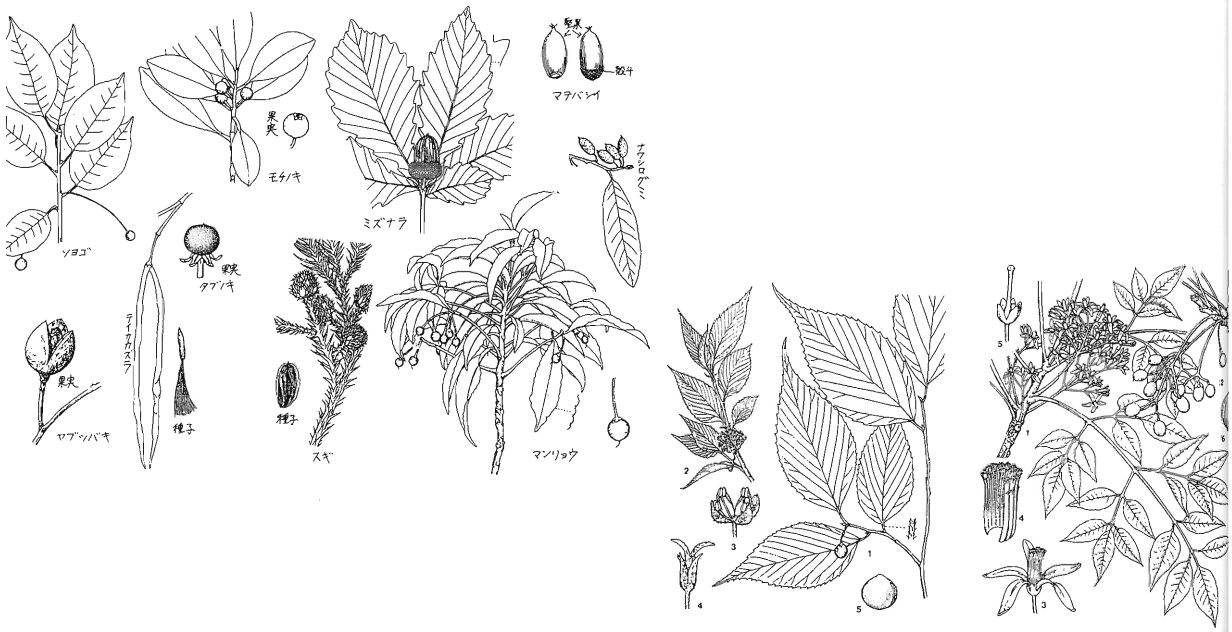
雨上がりの京都御苑、樹上の雪が溶けて水滴となっていたたり落ちてくる。蛤御門から東へ、そして南へ紅梅白梅の中を宗像神社へ向かう。このあたりはシラカシ、アラカシ、ツクバネガシなど、いわゆるどんぐりの仲間が多い。秋に結果したまままだしっかり木についているもの、落下している実、殻斗だけになったものなど、樹高や幹の太さもまちまちである。マテバシイの実は細長く3cm程、シリブカガシの殻斗は深くえぐれている。芝生の中は大きな黒松、赤松、クヌギやムクノキなど樹高10mを越す大木も多く見られる。

昨年11月の観察の時はムクノキ、エノキの実を食べながら歩いた。エノキはプチプチとしていて歯ざわりが小気味よい。ムクノキの実は少し甘みがあってネットリとした感じがする。宗像神社から拾翠亭の塀に沿って九条池へ、このあたりはアオキ、ツバキ、カエデそしてケヤキや松、杉など種類も豊富で、いろいろな実の観察ができる。それにしても九条池周辺から鷹司邸跡あたりにかけて背の高い木が切られている。エノキや松も含めて切り口が痛々しい。後で尋ねてみると拾翠亭からの東山の借景が見えにくくなったから伐採されたとのこと、自分の年令よりも長い命を重ねている木々たちを無雑作に切ってしまう心が、とても残念に思えて、少し悲しくなりました。丸太町通りに面したテニスコートの横を通り抜けて、休憩所で昼食をとり、午後は富小路広場の脇道を抜け、寺町御門から外へ出る。塀にそって歩くと、ここにも松やカエデ類が多く植えられ、野鳥もこの



小さな林に来ることが多いと聞く。特に御苑の木が切られたり工事などで雰囲気がざわついていたりすればなお更のことのようだ。清和院御門から再び御苑の中に入る。マキ、カエデ、アオキの小径を歩く。餐宴場広場の横を通り、雑木林が自然のまま残っている中を、落葉を踏みしめながら歩く。大きなメタセマイヤの林の中を実を集めながら歩く。松とエノキ、松とムクなど二本寄り添ってねじれながら生育している木々もある。石薬師御門から今度は西へ、祐の井の脇に大きなクロガネモチの木があって赤い実が美しい。シガやタヌの木も見られる。今出川御門から近衛邸跡に出ると池の改修工事が行われていて、全体的に随分荒れている。児童公園では梅や桃、カエデろう梅、イイギリ、アオキなど明るい木が多い。乾御門から宮内庁事務所を通り休憩所に到着。カクレミノノキ、カシ、大イチョウ、カゴノキそれにツバキやムクの木も見られる。駐車場脇の小径にはマテバシイの木が多い。

街の中心でこれほど多くの種類の植物（400種）や小鳥が見られ、豊かな自然が残っていることはすばらしいことだと思う。今後、絶滅寸前のタシロランや他の市街地では見ることのできなくなった大タカが飛来するという今の状態を一歩でも後退させてはならない。少なくとも現状を維持する努力が必要です。植物の種類が多いことは、京都盆地のような、すりばち状の地形では特に空気の浄化に役立ち、騒音防止や水系の浄化、そしてヒートアイランドと呼ばれる熱化現象をおさえる働きもあります。そのような大きな役割を担っている京都御苑は私たちの生活に欠くことの出来ないオアシスなのです。自然の豊かさを求めることは心の平安を求めることにもつながっているのではないでしょうか。

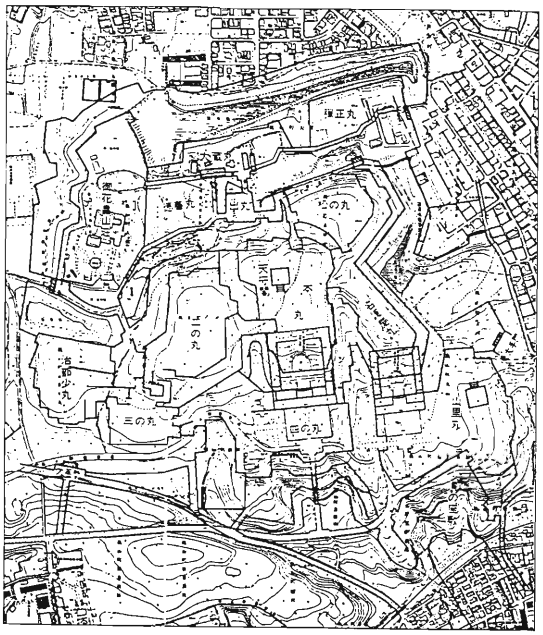


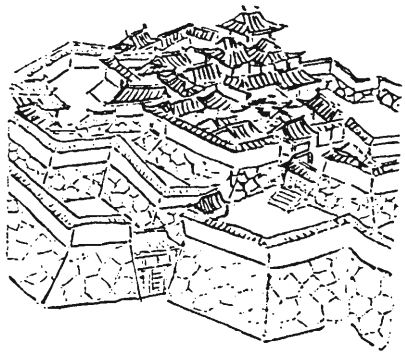
〔今後の課題〕

御苑をはさんだ大通り、今出川通りと丸太町通り、烏丸通りと寺町通り、そして御苑の中央で同時刻に温度を計る。御苑に流れ込んでいる水系地図の作製。御苑の周囲の石垣がどの様な石で、どこから運ばれてきたものか調べる。昆虫やきのこの種類を観察する。

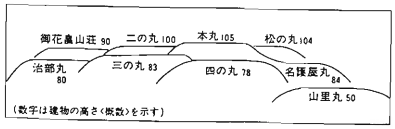
12月例会　12月17日

伏見の歴史や寺院、十六師団の戦跡をたどる。桃山御陵、藤の森神社の植物の観察、大倉酒造で酒造りの学習。きき酒も行う。

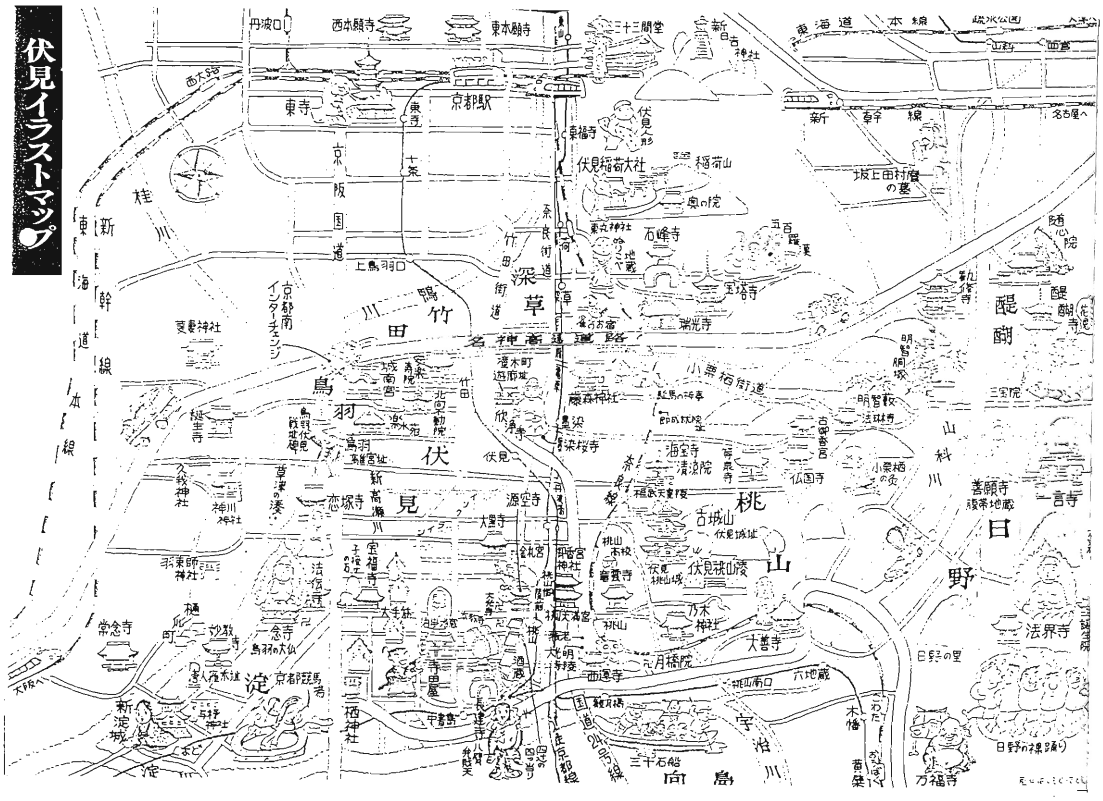




⇧　古地図に見られる伏見城天守閣
（若林春和堂所蔵）



伏見イラストマップ



'96 1月定例会

深泥ケ池で野鳥と地形の観察

御園橋付近の鴨川で水生昆虫観察と川の汚染度を調べる。

実　施　　'96 1月21日　35人

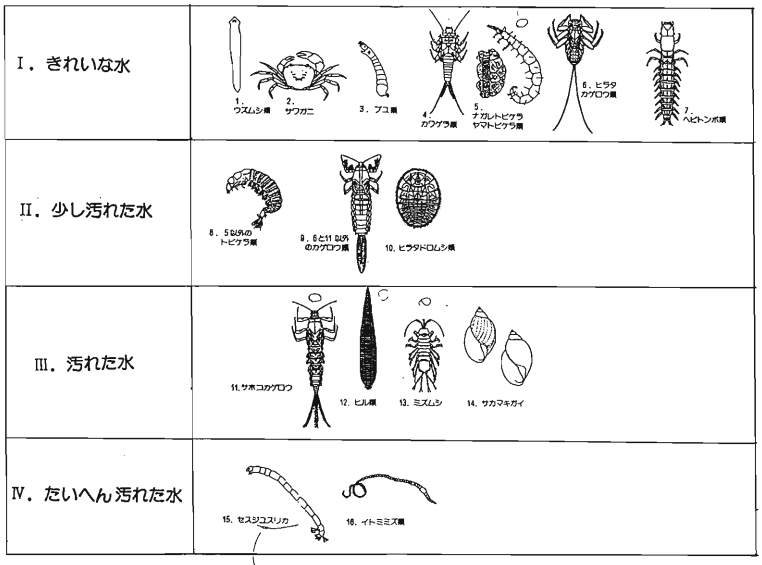
1月にしては暖かい日、深泥ケ池横の児童公園に集合して野鳥の観察を始める。おしどり、ナナガガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、それぞれがまざり合って岸辺に寄ってくる。総数100羽程、オスのマガモのメタリックグリーンの頭や、オナガガモの毛が特徴ですぐ見付けることができる。中でもオスのオシドリが美しい。人間が近づくと寄ってくるのは、えさがもらえるからか？　立看板に「むやみにえさをやらないように」との表示がある。市街地で、しかもすぐ横を車が通るようなこんな場所でも、こうして毎年シベリアから避寒のためにやってくる可愛いお客様。突然いっせいに鴨たちが飛び上がった。空を見ると猛禽類のとびが上で大きくゆっくり輪を描いている。私たち人間は、気がつかなくても、見はり役の鴨が危険信号を発したものと思われる。

池のまん中のチンコ山のかれ草の中にモゾモゾもぐっている鳥もいる。ミツガシワの白い花にもまだ早く、水面にはじゅんさいが浮んでいる。池を見ながら浮島の側まで入るとコナラや松が山の斜面に見られ、足元にはジョウジョウバカマの小さなロゼッタ状の葉が開いていたり、つげの木がはえていたりする。岸辺にはジャイアントサギタリアの枯れた茎が浮んでいる。クヌギ、赤松などの林を抜けて池の周囲半分程進んだところで引き返し再び公園横に出て、上賀茂方面へ向う。鴨川の歴史や京都の地質を勉強しながら三三五五、太田神社の前を通り、農家の庭先ですぐきの漬込風景を見ながら御園橋へ。今、この付近の鴨川では、川底を掘ったり土手の整備工事が行われていたりして、水がとても濁っている。石の下の水生昆虫を採集してみると、指標生物表の汚れた水Ⅲやたいへん汚れた水Ⅳのイトミミズやヒルの類がたくさんいる。鴨川でも上流といわれる御園橋付近でこのような状態ならば、下流ではさぞかしもっともっと汚染が進んでいるだろうと推測される。空気の汚れと同様、水の汚れも私たちの命の基にかかわる問題だけに、やりきれない思いと、少しでも汚さない努力を私たち一人ひとりが自覚をして、日々の暮らしの中で続けていくこと、又きめ細かにあらゆる機会を利用して訴えていく必要性を感じました。

〔今後の課題〕

鴨川に定点を決めて同時刻に温度や水生昆虫　種類、ＰＨを調査してみる。鴨川の右岸左岸の土手の植物の分布を調べて表にしてみる。

川のよごれぐあいをしらべる　指標生物の図



水のよごれかたで、住む生物がこんなにちがう

鴨を見るのは、今が旬です

冬の深泥池は野鳥の楽園です　観察しよう

おめでとうございます。今年もよろしく。みんなで楽しいサークルをつくりましょう。新年会で一年の計画を話し合いましょう。

雨天でも実施します。

カモの冬は恋の季節

求愛ディスプレー中のオスガモたち

えと文　ののたんぽぽ

今の時期、町の中の川や小さな公園の池などにも、次々と小鴨の群れがやってきています。野鳥を見るのは、今この時期からが一番入りやすいようです。体が大きく、近くからじっとしていると、双眼鏡はなくても十分、通勤・通学・お買い物のいき帰りにでも、ちょっと水辺を見てみませんか。

ほとんどの鴨は、シベリアなどの北方から日本まで渡ってきています。それだけでも“遥路はるばる”ですが、そのうえにこの時期、彼らはお嫁さん探しに必死なのです。

カルガモ以外の鴨は個体相手をかえています。こういうと“うらやましい・つれて歩くかもしれませんが、実際彼らのようすを見ていると、個体毎に新たに相手を見つけなくてはならないというのは、かなり大変なようにも思えます。

一羽のメスをオス数羽で囲んでいるようなしぐさでメスの気をひこうとするプロポーズ競争。一見かわいいお遊戯みたいですが、実はきびしく真剣なお見合いなのです。

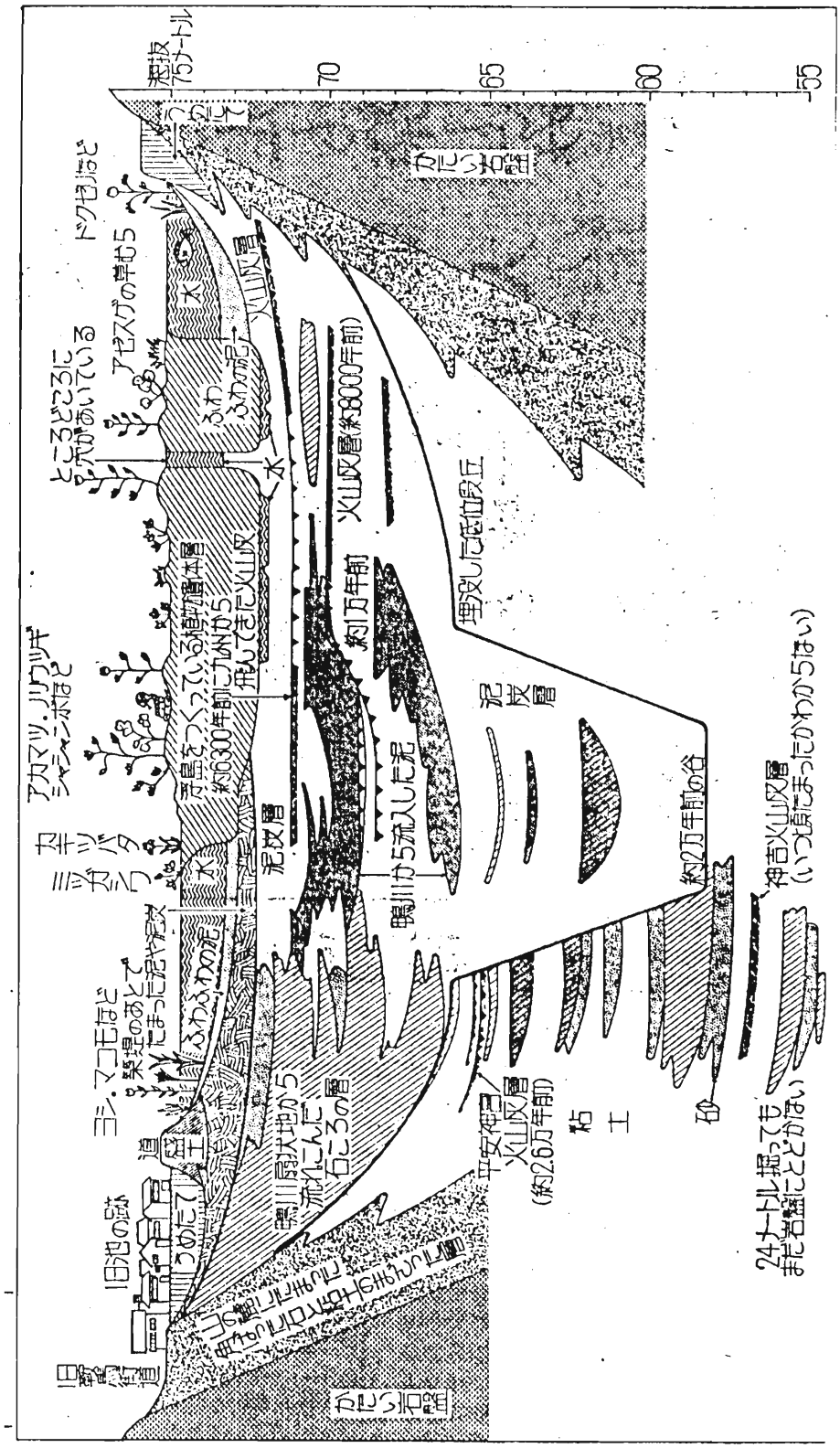
選択権はメスにあるせいか、この時期のオスは派手すぎるぐらい色きれいな姿をしています。この点、「進物主」の男的センスにはほんとに感服。それに引き換えメスはどれも似たような地味な姿。子育てのために目立たないほうが安全だからだそうですが、逆にいうとオスはそれだけの危険をおかしてもアピールしようと必死だということですね。

身近な水辺のファッションショー

これみ～んなオス!

わが家の近所の多摩川は、主産の頃の大雨の影響で流れが大幅に変わり、それにつれて鳥の種類や数、周辺部も変わっています。野鳥を見ていると自然の変化がよくわかります。そして、「川って本来こんなふうに変動するものなのだ」と気付かされたりも。

深泥池の地層


海抜
75メートル
70
65
60
55
かたい石盤
ドクゼリなど
つかえて
ところどころに
穴があいている
アセスゲの草など
水
ふわふわ泥
火山灰層
火山灰層(約8000年前)
埋没した低位段丘
アカマツ、リョウブ
シャシャンボなど
約1万年前
泥炭層
約6300年前に九州から
飛んできた火山灰
泥炭層
鴨川から流入した泥
カキツバタ
ミヤマウツボ
水
ふわふわの泥
ヨシ、マコモなど
築堤のあとで
たまった泥や泥炭
道
旧池の跡
つめたい
鴨川扇状地から
流れこんだ
石ころの層
かたい石盤
平安神宮
火山灰層
(約2.6万年前)
粘土
砂
約2万年前の谷
神宮火山灰層
(いつ頃たまったかわからない)
24メートル掘っても
まだ岩盤にとどかない

今後の予定

２月例会　２月19日

真冬の京都御苑の様子と植物の分布や石垣の観察、中心からの地形の勾配度を目線で推測してみる。

３月例会　３月17日

昨年と同時期で今津の座禅草や湖北の地形野鳥観察、せりやふきのとう、かんぞう等、芽吹いたばかりの野草の観察と採集。

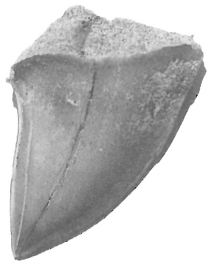
４月例会　４月21日

静原から岩倉長谷（春の山菜や木の芽の採集、そしてそれらを天ぷらにして食べてみる。付近の様子も観察する。

５月例会　新緑の比良山で地形や植物の観察

６月例会　２年を経た神戸の震災跡、表六甲山頂から神戸の町全体を見て地形と地震での変化の観察、五助ダムや六甲高山植物園の見学。

７月例会　伊吹山では山頂付近の石の中のフズリナやその他の紡錘虫石灰岩の風化状況をみる。高山植物の観察。

８月例会　琵琶湖博物館と湖南の地形をみる。

９月例会　２白３日、奥能登で化石採集と日本海岸の地形や風をみる。３月末に下見を兼ねて、巡検を行った。能登金剛、関野鼻では２cm大のサメの歯の化石を発見した。写真資料ＡＢ　時国家や千枚田、総持寺の見学も予定に入れる。参加人数予定20名。